

【論 文】

# 学生が「外国人生徒大学見学ツアー」に支援参加することの教育的意義†

林 朝子\*

三重大学教育学部\*

本稿では、外国人生徒を対象とした大学見学ツアーを取り上げ、支援参加した三重大学教育学部学生（以下、学生と記す）にとって、見学ツアーへの参加の教育的意義がどのようなものであったのかを、7名のレポートを基に明らかにする。「外国人児童生徒の現状」、「教育面での取り組み」、「学習意欲の維持」の3点から分析と考察を行った。その結果、見学ツアーで外国人生徒と交流する中で、学生らがこれらの3点について、具体的な気づきが得られていることがわかった。

キーワード：外国人生徒、大学見学ツアー、学生の気づき

## 1. はじめに

本稿では、平成30年8月に外国人生徒<sup>1)</sup>を対象に実施した三重大学見学ツアー（以下、見学ツアーと記す）での取り組みについて取り上げ、支援参加した教育学部学生にどのような教育的意義があるのかを明らかにする。

平成29年3月に公示された学習指導要領（以下、H29指導要領と記す）では、小学校中学校の第1章 総則・第4 児童/生徒<sup>2)</sup> 発達の支援・2 特別な配慮を必要とする児童/生徒への指導において以下のように外国人児童/生徒への教育に関する記述がある。

(2) 海外から帰国した児童/生徒などの学校生活への適応や、日本語の習得に困難のある児童/生徒に対する日本語指導

ア 海外から帰国した児童/生徒などについては、学校生活の適応を図ると共に、外国における生活経験を生かすなどの適切な指導を行うものとする。

イ 日本語の習得に困難のある児童/生徒については、個々の児童/生徒の実態に応じた指導内容や指導方法の工夫を組織かつ計画的に行うものとする。特に、通級による日本語指導については、教師間の連携に努め、指導についての計画を個別に作成することなどにより、効果的な指導に努めるものとする。

H20指導要領では「海外から帰国した児童/生徒などについては、学校生活への適応を図るとともに、外国

における生活経験を生かすなどの適切な指導を行うこと。」との記載にとどまっていたが、H29指導要領では、日本語指導に関して詳しい記述が加えられているのが特徴である。つまり、学校現場からは外国人児童生徒への教育や指導が可能な教員が求められているといえる。本取り組みは、支援者として見学ツアー参加した教育学部学生が直接に外国人生徒と触れ合い、交流する過程における学びにより、将来的に彼らに関わる学校現場や社会に寄与できるものを得られるものであるとの考えから実施されたものである。

## 2. 外国人児童生徒を取り巻く状況

### 2.1 外国人児童生徒の現状

在留外国人数は、平成20年のリーマンショック後に一時的に減少傾向にあったが、平成24年以降は増加傾向にある。国籍については、ブラジル、ペルーなど南米の在留者数よりも、フィリピン、ベトナム、ネパール等、東南アジアや南アジアからの在留者が増えてきているのが近年の特徴である。

在留外国人数の増加に伴い、外国人児童生徒も増加しており、平成27年度には公立学校に在籍する外国人児童生徒数は公立小学校45,267名、中学校21,437名となっている<sup>3)</sup>。また、日本語指導が必要な児童生徒については、平成28年度には小学校(外国籍)22,156名、小学校(日本国籍)7,250名、中学校(外国籍)8,792名、中学校(日本国籍)1,803名となっており<sup>4)</sup>、<sup>5)</sup>、「国際結婚等の家庭からの日本国籍・二重国籍の児童生徒が急増」<sup>6)</sup>という背景が指摘されているように、従来、日本語指導が必要とされてきた新渡日外国人の

子ども達だけが対象ではなくってきている現状がある。居住スタイルについても、従来の集住から散在化が進んでおり、日本語指導が必要な児童生徒の在籍人数別学校数も5人未満の学校が8割程度を占め、一定の地域への集住だけではない居住に変化している。

## 2.2 教育面での取り組み

2.1 で触れたように、児童生徒の国籍や母語は多岐に渡っており、母語や日本語の習得レベルも子ども達により異なる状態である。児童生徒の中には母語・日本語の両言語での十分な習得ができていない、ダブル・リミテッドの子ども達も顕在化しており、彼らは学習能力の低下が著しく、学校現場での日本語指導の重要性が指摘されるようになってきた。そのような状況の中、平成20(2008)年「外国人児童生徒教育の充実方策(報告)」<sup>7)</sup>において「外国人児童生徒の受入の意義」として、「学校教育を通じて外国人児童生徒に我が国の社会の構成員として生活していくために必要となる日本語や知識・技能を習得させることは、外国人児童生徒が我が国において幸福な生活を実現するために不可欠な条件であるとともに、我が国の社会の安定や発展にとっても極めて有意義である」と考えられるとし、また、同時に日本人児童生徒にとっても「共に学ぶことにより、日本人児童生徒にとっても、広い視野をもって異なる文化を持つ人々と共に生きていこうとする態度をはじめとした国際社会を生きる人間として望ましい態度や能力が育まれる」とし、外国人児童生徒への教育に取り組むべき方向性が示された。

その後、主な文科省の教育支援施策として、平成23年『外国人児童生徒受入れの手引き』の作成と配布、平成23年「情報検索サイト“かすたねっと”」の開設、『外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント～DLA～』の開発と配布、平成26年には日本語指導が必要な児童生徒を対象とした「特別の教育課程」の編成・実施を可能とする制度改正と進んだ。「特別の教育課程」では、日本語指導担当教員が児童生徒への指導の中心となり、日本語能力の把握、指導計画の作成、日本語指導及び評価を行うこととされているが、児童生徒が多く時間を過ごす在籍学級での学習に関しては、担任や各教科教員が日本語指導担当教員と連携し、各児童生徒の日本語能力にあった支援を導入し、教科指導を進めていくことが重要視されている。

中学校から高校への進学率の点では、全国で約8割<sup>8)</sup>ともされているが、全国規模での詳細な調査は行われていない。実際には、日本語能力が不十分のため、高校の選択肢が限られているのが現状であろう。また、

高校入学以降の調査については公表されておらず、どの程度の割合で高校卒業まで辿り着けているのかは不明である。

## 2.3 学習意欲の維持

外国人児童生徒の高校進学後の進路については不明な点が多いが、近年問題視されているのが、学習意欲の維持の難しさである。「外国人の子供等の観点に立つて、学校における学びの先にどのような未来が開かれているのかといった将来像や具体的なロールモデルを提示し、学びの動機づけを図っていくことが重要」<sup>9)</sup>とされているように、将来像が見えない子ども達が多いのが現状である。奥山(2018)も外国人児童生徒が日本社会で自立し生活をしていくためには「職業選択を含めたキャリア形成や自己実現というマクロな視点が不可欠」と指摘しているように、外国人児童生徒にとっての教育を長期的に見ていく必要がある。

外国人児童生徒が将来像を描けない要因としては、取り巻く生活環境、限られた人間関係、得られる情報の少なさ等、様々なものが考えられるが、具体的な将来像を少しでも描くことができれば、それを実現しようとする努力や学習意欲へとつながるはずである。現在、多くの自治体で、高校進学ガイダンスやキャリア教育等の取り組みが行われており、高校進学率の向上という成果につながっている。しかし、本稿のように、外国人生徒に対する大学見学ツアーを実践的研究の視点を踏まえ取り組んでいるものではなく、今後の外国人児童生徒へのキャリア教育の一方法として注目に値するものであろう。

以上、外国人児童生徒を取り巻く状況について、「外国人児童生徒の現状」、「教育面での取り組み」、「学習意欲の維持」の3つの観点から述べた。

見学ツアーは外国人児童生徒のキャリア教育の一助となることを狙いとして、外国人生徒を対象として実施したが、ツアーには教育学部学生が外国人生徒に付き添い、手助けする役割を担った。学生のツアー支援参加は、学生が外国人児童生徒に係る上記3つの観点について気づきを得ることを狙いとした。

本稿では、特に支援参加した学生に焦点を当て、見学ツアーを通して、3つの観点について学生がどのような意識や気づきが得られているのか、また、どのような角度からの解釈となっているのかを明らかにしていく。

### 3. 取り組みの概要

本取り組みである大学見学ツアーは、平成 29 年度より継続している三重大学地域貢献事業「外国人児童生徒の学びの継続を目指す支援活動ーキャリア形成につながる大学見学ツアーの実施ー」に基づき、津市教育委員会と連携し実施したものである。大学と地域の関係機関との連携・協働は外国人児童生徒の教育の指導体制の整備・充実のために促進すべきものとされており、教育支援の在り方として望ましい形である。

参加する外国人生徒にとっては、大学という場所を少しでも知り、自身の将来像をイメージするきっかけとし、学習意欲の継続や向上に役立つことを目指した。支援参加の学生にとっては、まず、外国人生徒との交流自体が非常に貴重な経験となる。そして、生徒達が大学という初めての場所を訪問する中で、言葉や行動で表す驚きや気持ちの変化を詳細に感じとり、外国人生徒達を取り巻く状況について理解し、更に、彼らへの教育の在り方等を考える契機を得られる場となる。

ツアーの実施概要は以下である。

実施日時：2018 年 8 月 8 日（水）10：15～16：00

実施場所：三重大学キャンパス

参加生徒：津市内中学校に在籍する外国人生徒 20 名  
（中学 1 年 13 名、2 年 2 名、3 年 5 名）

支援学生：三重大学教育学部学生 7 名（日本語教育  
コース 4 年 3 名、国語教育コース 3 年 4  
名）

参加教員：津市教育委員会・生徒在籍中学校教員 8  
名  
三重大学教育学部教員 1 名、人文学部  
教員 1 名

ツアー内容：国際交流センターロビー見学、図書館・  
情報科学館見学、生物資源オープンキャン  
パス参加（研究室訪問）、人文学部オ  
ープンキャンパス参加（体験授業参加）、  
学生食堂にて昼食（スケジュールは配布）

生徒は 2～3 名ずつのグループに分かれ、各グループ  
に学生が 1 名入り、学生が中心となつてのグループ活  
動を基本とした。

### 4. 支援学生の背景

見学ツアーに先立ち、7 月 23 日にオリエンテーショ  
ンを行った。その際の事前アンケート結果を基に、支  
援学生 7 名の外国人児童生徒との交流や日本語指導  
経験の有無や既有知識等について確認した。なお、A～F

は学生を表し、また、下線は筆者によるものである。

u003cdiv data-bbox="512 137 765 151" data-label="Section-Header">

#### 4.1 外国人生徒との交流の有無

交流経験は経験が無し 6 名、経験有りが 1 名であつた。経験有り 1 名は、ボランティアとして外国人生徒への教科指導や日本語指導に触れており、多少であるが生徒への接し方もイメージできているようであつた。

#### 4.2 外国人生徒の国籍

「外国人生徒の国籍はどこが多いと思うか」という質問に対し、ブラジル 7 名、フィリピン 6 名、中国 3 名、韓国 2 名、ポルトガル 2 名、インド・ネパール・ベトナム・チリ各 1 名ずつ、という回答を得た。

ブラジル、フィリピンが多いという知識は持っているようであるが、近年増加傾向が著しいベトナムについては知らない学生が多かつた。ポルトガルという回答は、後日口頭にて確認したところ、ブラジルでの言語がポルトガル語であるため混乱したとの説明であつた。

#### 4.3 見学ツアーで注意しようと思うこと

次のような記述が挙げられた。

A	<u>話が伝わるようにわかりやすい日本語を使う。子ども達が質問しやすい雰囲気を作る。</u>
B	<u>積極的に話しかける。</u> <u>相手に話が伝わっているか確認しながらコミュニケーションをとる。</u>
C	<u>説明するだけでなく、中学生のしたいことや考えていることを聞いて、それに関する行動・会話をしたい。</u>
D	<u>大学について知ってもらうことで、同世代の子との交流の中でも話が出るような活動にしたい。</u> また、たくさん話す機会も作りたい。
E	<u>お互いの文化を尊重できるように交流したい。</u>
F	<u>やさしい日本語で話す。中学生からも話が聞けるようにしたい。</u> 話す内容やタイミングも気を付けたい。
G	<u>会話を途切れさせないように、まんべんなく会話する。大学の良さを知ってもらう。</u>

A, B, F が日本語で伝わるかどうか意識を向けられていたが、具体的にどのようなレベルの日本語を想定した回答かはわからない。また、D, G が大学を知ってもらうことを取り上げており、生徒らにとって訪れることが少ない場所であることを意識していたと考えられる。その他に、中学生の興味関心を大切に、積極的に話しかけようとする姿勢が見られた。

#### 4.4 見学ツアーで生徒に聞きたいこと

生徒達に聞きたいこととしては、以下のことが挙げられた。

A	<u>何に興味があるか。大学のどういうところにひかれたか。</u>
B	中学校生活で楽しいこと大変なこと最近のはやり。
C	<u>どんなことに興味があるか。何を勉強したいか。</u>
D	学校でどんなことをしているかなど、学校関係のこと。
E	三重（日本）のよいところ、すきなところ
F	普段の生活で楽しいと思うことや日本人の友達について。
G	普段の学校の様子や流行している遊びなど。

A, C は、生徒の興味や関心を取り上げており、将来的なことを聞きたいという意識が働いていたと考えられる。B, D, F, G は、現在の学校での様子に関心を向けていたようである。E は 4.3 と合わせると、異文化に着目していたと考えられる。

#### 4.5 中学生が抱える問題

学生が想定する中学生が抱える問題点としては、以下の点が挙げられた。

A	日本人学生との <u>コミュニケーション</u> 。文化の違い。
B	<u>言語</u> 、 <u>文化</u> 。
C	<u>言葉の壁</u> 。
D	進学の問題、いつまで日本にいるかなど。
E	学習方法、 <u>コミュニケーション</u> 。
F	<u>ことば</u> 、 <u>文化</u> の違い。
G	<u>言語</u> による壁、 <u>文化</u> による違いから生まれる価値観への違い。

言葉・言語・コミュニケーションに触れた学生が多く、6 名であった。また、文化についても 4 名が取り上げていた。学習や進学については、1 名ずつの回答であった。言語や文化の問題の先に、学習や進学の問題が位置づけられているのかどうかは明確には把握できていないが、言語・文化という点に焦点が当てられる傾向があったようである。

見学ツアー前のアンケートでは、7 名の記述が非常に短いのが特徴であった。全員が日本語教育関係の授業は大学で数科目は履修しているはずであるが、外国人生徒達との交流経験がなく、また、中学生が大学を見学する状況もイメージしにくいため、具体的な記述ができなかったのではないかとと思われる。

#### 5. 分析と考察

見学ツアー後、学生 7 名を対象に、見学ツアーに関するレポートとアンケートを課した。ここでは、これらのレポートとアンケートを対象に、2. で取り上げた「外国人児童生徒の現状」、「教育面での取り組み」、「学習意欲維持の困難ー将来像の不透明さー」の 3 点に関して、学生の意識・気づきや解釈がどのようであったかを明らかにするため、分析と考察を行った。

##### 5.1 外国人児童生徒の現状

生徒が持つ多様な背景に関する記述は 5 名の学生に見られた。

A	<u>保護者とも話す機会</u> を設けることも必須になり、今後どのように（母国に帰るのか日本に居続けるのか）生活していくのかを聞いたり、どれくらいの日本語のレベルを習得したいのかなど、親の都合で日本に来ている子が多い分、話をすることは必要だと感じます。また外国人児童生徒が目標や夢をもったとき真摯に向き合ったり相談に乗ったりできる環境も必要だと思います。「外国人だから」という理由で難しいと言われたり、心に秘めているけど話せなくて周囲の言うがままに働いていたりする子どもも多々居ると思うので、慣れていない環境だからこそ、 <u>積極的に話しやすい環境</u> を作っていくべきだと思います。
C	生物資源学部の学生から「外国の子ですか？」と聞かれた。その学生は恐らく、2 人の生徒に日本語が通じるかという意味を込めて質問をしたのだろう。2 人は少なくとも日常会話をするのに困らない程度に日本語が話せる。だからといって、「日本人です。」とは答えられない。とっさに「 <u>外国にルーツのある子たちです。</u> 」と答えた。もし 2 人が自分を日本人だと認識していたら、日本ではなく親と同じ国の人間だと認識していたら、 <u>と思うとどんな答えが良かったのだろうと考えてしまう。</u> ／生活の中で 2 カ国語以上を使い分けていると話していたのが印象に残っている。
E	<u>ルーツのある国の事など一人ひとりのパーソナリティな（原文ママ）部分</u> を聞いていこうと思ったのですが、家庭環境につながる部分ではないかと聞いていいのかわからず、自分からは聞くことができませんでした。
F	私たちが思っているより <u>外国に繋がる子どもたちは不安要素が多く、普段から助けが必要なことがある</u> ことに気がつくことができた。中でも一番驚いたのは、日本に来る前からいじめの心配をしていたということである。実際その生徒はそうないじめにあうことはなかったと言っていたが、日本に来る前からそのような不安を持たせているのはとても驚いた。私たち大学生にもサポートで

	きることはたくさんあると感じたので、今後もそのような生徒たちと関わっていききたいし、教員になってからもその意識を忘れずにしていきたいと思った。
G	会ってすぐに何歳で結婚したいかを聞かれた。これを異文化によるものと捕らえてよいのかわからないが、 <u>出会ってすぐの人にはしない質問</u> であったので、異文化を感じた。

生徒達が持つ多様な背景については、意識が向いているが、実際に生徒達の背景についてどの程度まで聞いてよいのかという学生側の不安が確認できた。Eは、ツアーで担当した生徒達とのコミュニケーションの中で、生徒達のルーツについて聞きたいと思ったが、「パーソナリティの部分」が「家庭環境につながる」と考え、ルーツに関する質問が自分からはできなかったと答えている。また、Cはアイデンティティとしての文化や国がどこであるのかを生徒達に聞けず、他学生からの質問に「外国にルーツのある子たち」としか答えられず、生徒達が本当はどう考えているのかわからないままで終わってしまっている。

一方、Fは生徒達のいじめへの不安の話を受け、「不安要素が多く、普段から助けが必要なことがある」と記しており、さらに、Aは「保護者との話す機会を設ける」ことで、子供の様子や将来についての考えを聞いたり、生徒等が「積極的に話しやすい環境」を作っていったりするサポート体制の充実の必要性を述べている。

今回、十分に聞きたいことが質問できなかった学生も外国人生徒達が持つ複雑な背景を感じており、感じているからこそ質問を躊躇してしまったと考えられる。今回、生徒達は見学ツアーに自主的に参加しており、大学見学や大学生との交流を楽しみにしていたはずである。生徒達が話しやすい雰囲気を作ることで、個人的な内容であっても話せ、話したいという気持ちになることを学生に伝えていく必要を感じた。

## 5.2 教育面での取り組み

全員が日本語について記述していた。また、生徒達に対してどのような姿勢や態度が適当であるのかについても考えを深めている様子も見られた。

A	更にわかりやすく伝えるために、 <u>簡単な言葉</u> を使う、 <u>外来語や若者言葉を使わない</u> 、 <u>ジェスチャーを用いる</u> などの工夫ができたと思った。
B	もう少し伝えたい情報を取捨選択して、 <u>簡潔に話せばよかった</u> 。
C	<u>難しい漢語はあまり使うべきではない</u> と思った。 <u>わかりやすい語句</u> でできるだけ <u>文も短く</u> するとより

	伝わりやすいと感じた。／ <u>説明の仕方を学びたい</u> 、 <u>回りくどい話し方をしないよう</u> 、 <u>分かりやすい教え方を身に付けたい</u> と思った。
D	難しいと感じたのは、専門的内容を子どもたちに <u>どう伝えたらわかりやすいか</u> ということでした。／ <u>分かりやすくやさしい日本語</u> をさらに勉強して、誰にでも伝わる言葉遣いを身につけなくてはならないと感じました。
E	大学の施設などを説明して反応が無かった時、聞こえなかったのか、言葉が理解できなかったのかどちらか分からなかったことがありました。自信が無いからといってはっきり話さないと、 <u>伝わらなかったのか聞こえなかったのか</u> わからなくなるため、 <u>伝えるか自信が無くても大きな声ではっきり話すことが大切だ</u> と思いました。／ <u>グループの中に特別支援が必要な生徒がいました</u> 。「 <u>外国にルーツを持っている</u> 」かつ「 <u>特別支援</u> 」というふたつの特別な教育が合わさったときの難しさなどを中学校の先生に教えて頂きました。いままで、それぞれ <u>一つずつの特別な教育</u> については学んできましたが、 <u>それらが複数必要</u> である場合を考えたことがなかったため、今回の体験はそのことについて考える貴重なきっかけとなりました。
F	<u>わかりやすい日本語</u> で伝えなければ、と身構えていた部分も少しあった。しかし、 <u>生徒は理解しようと思って私たちの話を聞いてくれたので話しやすかったし</u> 、 <u>生徒が話す際も一生懸命伝えようと思って日本語で話してくれるので</u> 、思っていたよりコミュニケーションをとることは難しくなかった。／ <u>ジェスチャーを用いたり、やさしい言葉を使ったりして</u> 伝え、また、 <u>理解できるまで待つてあげる</u> ことが必要と感じた。
G	単語を聞いても理解が難しいときや、少し聞き取りにくいときに、 <u>率先して言い換える</u> ことでより大学での学びについて興味をもってもらうことを目標としてこの機会に取り組んだ。／ <u>なるべくわかりやすい単語で伝えようと努力した結果</u> 、 <u>伝わったような感触を得たので非常に自信になった</u> 。／私が「今のわかった？」と聞くのは親切であるかもしれないが、あまり聞きすぎるとかえって迷惑で、馬鹿にしているのかと思われてしまうかもしれないと感じた。

アンケートで「わかりやすい日本語を話せた」という質問に対しては、6名が「どちらともいえない」と答え、1名が「そう思う」と回答した。「どちらともいえない」という回答が多かったのは、以下でも触れるように、生徒達の反応からは伝わっている確信が得られなかったためと考えられる。

レポートでも日本語についての記述は多く、日本語をよりわかりやすく話すための方策が挙げられていた。

ジェスチャーを用いる、情報を選び簡潔に伝える、短文でまとめる、やさしい日本語を使用する等である。しかし、具体例は挙げられておらず、実際にどの程度が「やさしい日本語」や「わかりやすい日本語」と考えているのが十分に把握できなかった。

Eが「伝わるか自信が無くても大きな声ではっきり話すことが大切」、Fも「生徒は理解しようと思って私たちの話を聞いてくれたので話しやすかったし、生徒が話す際も一生懸命伝えようと思って日本語で話してくれる」と述べているように、伝えたい、伝えようとする真摯な姿勢があれば、その気持ちが相手に伝わり、また、理解しようとする相手が聞く態度にも反映されると感じたのであろう。

また、相手が理解できているのかどうかという不安がEとGのコメントから読み取れる。Gは「今のわかった？」という質問を、生徒達の立場に立ち、何度も言われる際に感じる気持ちを考慮し、その質問を言い過ぎないようにしたいと考えている。Fは、「理解できるまで待つてあげることが必要」と、生徒達の理解しようとする過程を重要視している様子が窺える。

さらに、Eの「外国にルーツを持っている」かつ「特別支援」というふたつの特別な教育が合わさったときの難しさ」というコメントは非常に大きな気づきである。現在、学校においては、日本語の問題なのか、何らかの発達障害の影響があるのか、判断が非常に難しい外国人児童生徒が増加している。このような現状を鑑みても、Eの気づきは貴重なものであると言える。

### 5.3 学習意欲の維持

まず、「ツアー参加前に生徒は大学について、いろいろ知っているようだった」という質問に対して、7名全員が「あまりそう思わない」という回答であった。基本的に、生徒達全員が大学という空間のイメージができていなかった様子が窺える。

A	生物資源学部で試食をしたり生物を見たりしているときはとても楽しそうだったので、この関心からなにかに興味を持ってほしいと感じました。/外国人児童生徒が将来に向けて考える機会はとても大切だと思います。家族のために働きたい子、日本でなにかを学びたい子、資格をとりたい子など様々だと思うので、ニーズにあった支援をしていけたらよいと感じました。例えば今回のツアーのようなものや実際に仕事の現場を見せたり働くことを体験させたりすることなどがあります。母国とは環境や職種が全然異なる子もいると思うので、そこに慣れて卒業後に働いたり進学したりできるように支援していく必要があると思います。
---	--

B	外国につながる生徒の考える進路に、 <u>大学進学という選択肢がないのであれば、候補に入れてあげること必要</u> だろう。そういった意味でも今回のような、大学見学ツアーは素敵な活動だと感じた。実際に大学を見ることでイメージが湧いたのではないかなと思うからである。
C	<u>興味を持ち続けられる何かを持てれば、学習への意欲も向上する</u> と思います。手で触れたり体験できるものがあると、モチベーションが高く保たれるのではないかと思います。/情報科学館ではプロジェクターを見ながら、「これを使うことはあるのか？」や（遠くの風力発電の風車を見て）「あれは何？」という質問があった。
D	大学についてのことは、私から話すのではなく、 <u>子どもたちから聞いてくれたのが印象に残っています</u> 。大学については、通学手段や授業の時間・内容・様子、休み時間の過ごし方、学食などさまざまな質問をしてくれました。図書館の本の多さなどに驚いていた。 <u>今までに大学に来たことのない子どもたちにとって、大学はとても興味深いところであるということが改めてわかりました</u> 。質問の一つひとつ答えると、興味津々に話を聞いてくれて、 <u>もっとこれからも興味を持ってもらって勉強にさらに関心が持てれば良い</u> と思いました。
E	図書館の大きさ、綺麗さ、可動式棚に驚いている様子だった。/大学のように興味があることについて勉強できるところがあると知ることが学習への意欲向上につながる。
F	今回のオープンキャンパスはやはり「大学」ということもあり、目の前にまだ高校受験が控えている子どもたちからは <u>少し遠いように感じた</u> 。しかし、大学の <u>学びのスタイルや生活スタイルなどには興味を持っている生徒が多く、「はやく大学に行きたい」という子どもたちも見受けられた</u> 。また、 <u>研究の内容や勉強に興味を持っている生徒も多く、積極的に学生や教授と話をしていた驚く場面も多かった</u> 。日本語より英語の方がコミュニケーションのとりやすい生徒がいたが、人文学部の教授が英語で直接話してくださって <u>その生徒はとても喜んでいて、生き生きと話すその生徒を見て私はとても嬉しかった</u> 。 <u>このような体験は生徒にとって大きな物になるのではないかなと思うので、今後も機会があればいいな</u> と思った。
G	<u>将来のことを考える機会を設け、将来に向け明確な目標を持つようにすることが、勉強意欲の継続につながる</u> と思う。

全員が、大学進学を含め、生徒達が自信の将来像を思い浮かべることが学習意欲の維持につながると考えている。

C, D, E, Fは、生徒達が大学に興味関心を持って

いる様子を記している。生徒達の中学校にはない、大きな図書館や本の量に驚いたり、プロジェクター等の設備や風車といったような中学校にはほとんど見られないものに触れたりし、興味を持てたのであろう。Fの記述からは、積極的に大学教員に英語で話しかけるなど、関心の強さを表している生徒もいたことがわかる。

また、Bは「大学進学という選択肢がないのであれば、候補に入れてあげることも必要」としているように、生徒達の進路や将来の選択肢を広げている大切さを感じていることがわかる。Aは、生徒達が持つ将来像も様々なことから、「ニーズにあった支援」が必要であると捉えている。5.1でも触れたように、Aの学生は生徒達の多様な背景についても保護者や本人からの話を聞く必要性を感じており、将来像についても、それぞれの「ニーズにあった支援」という意識にまでつながっていると考えられる。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、外国人児童生徒の大学見学ツアーに学生が支援参加することにどのような学生への教育的意義があるのかを、外国人児童生徒を取り巻く3つの観点－「外国人児童生徒の現状」「教育面での取り組み」「学習意欲の維持」－から明らかにした。

まず、「外国人児童生徒の現状」については、学生らは生徒達が様々な文化や言語を持っていることを知ってはいるが、それをどの程度まで話題に挙げてよいのか困惑している様子が見られた。これは、学生が生徒達のアイデンティティやパーソナリティを重視している結果であり、生徒達の多様なルーツを尊重しているからこそその困惑であると言えるであろう。また、生徒達を理解するサポート体制の重要性にも気づけており、保護者の考えを知ることや生徒達が話しやすい環境作りという生徒達を取り巻く人間関係や環境にまで意識が向けられたことがわかる。

次に、「教育面での取り組み」についてである。学生全員が「やさしい日本語」「わかりやすい日本語」について触れられており、短文で話す、ジェスチャーを用いる等、生徒達に直接話す中で工夫した点や気づきが挙げられていた。また、生徒達が日本語を理解する過程を重要視している様子も見られ、日本語で会話を進める際に、生徒達が理解にある程度の時間がかかることに気づけたようである。

そして、「学習意欲の維持」については、大学進学も含め、自身の将来像をイメージできることが、学習意欲の維持につながることは十分意識できていた。生徒達が描く将来像そのものも多様であり、そのニーズ

に応え得る支援の必要性への気づきも見られた。

では、最後に今後の課題を挙げておきたい。今回の取り組みで得られた学生の気づきを今後どのように具体化していくかが課題である。例えば、「わかりやすい」「やさしい」日本語と記述しているが、実際にどのような文型や語彙を想定しているかが学生には十分にイメージできていたとは言い難い。今回の気づきが単なる気づきで終わらないよう、大学での授業の中でも更に理解を深め、実践の場で生かすことができるよう指導体制をとっていく必要がある。

また、本取り組みは、大学と教育委員会が連携し実施しており、外国人児童生徒への指導体制の在り方として非常に望ましい形である。支援参加する学生にとっても、外国人生徒と直接関わることができる貴重な機会である。しかし、取り組みを継続するには、物理的な面で様々な問題点が考えられる。将来的には、オープンキャンパスや大学祭の機会に外国人生徒達が自主的に大学を訪問するような流れを教育委員会や中学校と連携して模索していく必要があると考える。

## 注

- 1) 本稿では、外国に何らかのルーツがある児童生徒を「外国人児童生徒」「外国人生徒」という表現で表すこととする。
- 2) 小学校・中学校のH29学習指導要領において、「児童」「生徒」以外の文言は同様であるため、筆者が「児童」を「児童/生徒」と書き直したものである。以降の8箇所も同様である。
- 3) 文部科学省「平成28年度都道府県・市区町村等日本語教育担当者研修資料内平成27年度学校基本調査（平成27年5月1日現在）」を参照。（[http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kyoiku/to\\_dofuken\\_kenshu/h28\\_hokoku/pdf/shisaku03.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/to_dofuken_kenshu/h28_hokoku/pdf/shisaku03.pdf)）（2018年10月30日）
- 4) 文部科学省「平成28年度日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成28年5月1日現在）」を参照。（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/29/06/\\_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1386753.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1386753.pdf)）（2018年10月30日）
- 5) 三重県においては、小中学校（外国籍・日本国籍）で日本語指導が必要な児童生徒数は2,101名であり、全国でも6番目となっている。
- 6) 文部科学省「学校における外国人児童生徒等に対する教育支援に関する有識者会議「学校における外国人児童生徒等に対する教育支援の充実方策について（報告）」（平成28年6月）」を参照。（<http://>

www.mext.go.jp/b\_menu/houdou/28/06/1373387.htm) (2018 年 10 月 30 日)

- 7) 文部科学省 「初等中等教育における外国人児童生徒教育の充実のための検討会の報告 (平成 20 年 6 月)」に基づく. ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/042/houkoku/08070301.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/042/houkoku/08070301.htm)) (2018 年 10 月 30 日)
- 8) 文部科学省 学校における外国人児童生徒等に対する教育支援に関する有識者会議, 上掲 URL を参照. 例えば, 三重県津市の場合, 平成 29 年度高校進学率は 94.1%と全国的に見ても非常に高い数字である (津市教育委員会への聞き取り調査による).
- 9) 文部科学省学校における外国人児童生徒等に対する教育支援に関する有識者会議, 上掲 URL を参照.

## 謝辞

本取り組みは, 津市教育委員会の先生方, 生徒達の在籍中学校の先生方, そして, 生徒と学生の皆さんの多大なご協力によって実施ができました. 見学ツアー企画・実施においては, 三重大学人文学部・谷垣映子先生に多大にご尽力いただき, 生徒と学生への細やかなお心遣いもいただきました.

また, 人文学部広報委員会・生物資源学部広報委員会の先生方には, 生徒達のオープンキャンパス参加をご快諾いただきました.

心より感謝申し上げます.

## 付記

本取り組みは, 平成 30 年度三重大学地域貢献活動支援事業「外国人児童生徒の学びの継続を目指す支援活動ーキャリア形成につながる大学見学ツアーの実施ー」の支援を受けたものである.

## 参考文献

- 奥山和子 (2018) 「キャリア形成を見据えた外国人児童生徒教育の必要性: TEM 分析を使って」『大學教育研究』26, 9-26.
- 川口直巳 (2014) 「学生の「多文化共生」意識へ育成を目指して」『教養と教育』13, 9-14.
- 林朝子・服部明子 (2016) 「学校における多文化共生の実現に向けた試みー学生の小学校クラブ活動への参加を通してー」『三重大学教育学部研究紀要』67, 445-460.

## SUMMARY

This article reports seven university students'

findings regarding a campus tour at Mie University held for foreign students from junior high schools in Mie prefecture. Seven Mie University students participated in the tour to assist foreign students. Students' responses to the post-tour questionnaire and subsequent reports clearly showed deepened understandings for the following three issues: the situational contexts of foreign students, educational approaches to foreign students, and the fostering of foreign students' motivation to study.

**KEYWORDS:** foreign students at junior high school, campus tour, students' realization

---

† Asako Hayashi\* :The Educational Significance for University Students through Supporting Activities for Junior High School Foreign Students at a University Campus Tour

\* Faculty of Education, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan